

井上円了記念研究助成 研究所プロジェクト

東洋大学に所蔵される中国語諸史資料の データベース構築と開発活用

研究代表者：千葉正史（文学部史学科・教授）

研究分担者：子島進（国際学部国際地域学科・教授）

研究分担者：竹内洋介（アジア文化研究所・客員研究員）

1 研究の背景

21世紀以降、日本をはじめ海外の大学・公的研究機関は、それぞれに研究のために収集・保管してきた様々な史資料（文献・文書・写真・映像そのほか）につき、出版・インターネット上のホームページなどを用いて、汎用性の高いデータベースを構築して、さらに内外の大学・研究機関の間でネットワークを形成して共同で研究の進展を図りつつ、同時に研究成果として広く一般に公開することが通例である。

こうしたなかで本学アジア文化研究所でも、2016年度から3年間にわたり井上円了記念研究助成・研究所プロジェクト「アジア諸言語史資料の汎用性データベース開発と構築」により、本研究所がこれまでに様々なプロジェクト研究のために収集・分析してきた様々なアジア諸言語史資料公開を目的とした汎用性の高いデータベースの在り方を研究・設計・開発して、構築を行い、国内外の大学・研究機関との連携を高めて、本学・本研究所の研究を活性化・さらなる推進をはかる基盤を整備してきた。

この過程において、学内外から本研究所に留まらず、東洋大学附属図書館に学祖・井上円了の時代以来、収集・保存されてきた貴重な中国語文献史資料のデータベース化の要望が寄せられたことを受けて、本研究所のみならず本学の図書館に収蔵されてきた中国語諸史資料につき、そのデータベース化とともに、広く内外の学界に活用の便宜を供与するシステム構築を目指すことが本研究プロジェクトの背景である。

2 研究の目的

本研究プロジェクトは、上記のように本研究所と東洋大学附属図書館が収集・保存してきた中国語史資料をデータベース化して、汎用性の高い、すなわち国内外の大学・研究機関とさらなる共同研究の進展をはかりつつ、国際的なアジア研究を推進する基盤形成を第一の目的としている。

既存の多くの研究機関が実施しているように、データベースは史資料の重要性を示すように工夫・設計し公開しなくては意味がない。幸いにして先行プロジェクトにおいてその指針を定めることができおり、開学以来、本学図書館が収集・保存してきた多くの貴重な中国語文献史資料について、図書館との共同作業、さらに学内に留まらず国内外の大学・研究機関・研究者の学術的研究に寄与する活用システムの構築を進める。

アジア諸言語史資料の中で中国語史資料に限定するのは、本学図書館において貴重な史資料が数

多く収集・保存されているからである。中国語以外の史資料については将来的な課題となる。

3 研究組織

研究員：千葉正史・子島進

客員研究員：竹内洋介

研究協力者：大室智人（客員研究員）・速水大（客員研究員）・工藤寿晴（客員研究員）・程楽（院生研究員）・小林栄輝（院生研究員）

分担役割

- ①中国前近代班：竹内洋介・大室智人・速水大・工藤寿晴・小林栄輝
- ②中国近代班：千葉正史・程楽
- ③イスラーム班：子島進

4 研究経過

今年度は、中国前近代班と中国近代班とに分かれて、研究プロジェクトを推進した。その経過について、以下に概要をまとめる。

東洋大学附属図書館から蔵書リストデータの供与を受け、各班ごとに漢籍の抽出作業を行った。その上で、各種漢籍目録と照合を行いつつ、漢籍の分類作業を行っている。次年度以降に実施を予定している現物との照合作業の前段階にあたる作業を実施しているが、数十万件にのぼる蔵書データからの抽出と分類であるため、作業にやや時間を費やしている。

また、2019年8月には、漢籍の採録基準の参考とする目的で、国立国会図書館関西館アジア情報室および京都大学図書館において出張調査を実施した。通常漢籍目録は、中国伝統の図書分類である四部分類（経史子集）の区分によって配列されているが、近年ではこの分類に含まれない漢籍（「新学部」：1911年以降刊行の書籍、「和刻本漢籍」：日本人が出版した漢籍）・準漢籍（日本人による編著および本文中に日本人が注釈や考証を加えて書名を付けたもの）を如何に配列するのが、大きな課題となっている。こうした漢籍については、統一的な採録の基準が未だ定められておらず、各漢籍所蔵機関で取捨選択され、独自の採録基準が採用されている現状がある。本学所蔵の漢籍目録を作成する上でもこの問題は避けて通れない問題であり、配列前に具体的かつ詳細な基準を定める必要があることから、今回の出張では、国内の漢籍所蔵機関のうち両図書館を対象に調査を行い、本学所蔵の漢籍を判断する際の知見を得た。

5 シンポジウム「中国史研究と史料利用の現況—漢籍・石刻・檔案—」

本研究プロジェクトの一環として、2019年11月23日（土）に「中国史研究と史料利用の現況—漢籍・石刻・檔案—」と題するシンポジウムを開催した。

詳細については、後掲のポスターを参照いただきたいが、当日は研究代表である千葉正史研究員による開会挨拶の後、竹内洋介客員研究員がシンポジウムの趣旨説明を行った。続く報告では、まず上智大学名誉教授の大澤正昭先生より「中国農書をどう読むか—農書の有効性と限界—」、陝西師範大学副教授の胡耀飛先生より「『資治通鑑考異』所見『九國志』輯考」と題する基調報告が行われ、ついで千葉正史研究員より「清末・民国時期檔案史料の公開と利用の現況—中国・台湾における中央政府檔案公開を中心に—」、兼平雅子・井上満奈実両氏より「留学生が見た中国での史料

取り扱いのいま」と題する研究報告が行われて、全体の質疑応答をへて終了した。唐代から近現代に至る幅広い時代の史料利用の状況について取り上げられた今回のシンポジウムは、本研究プロジェクトが対象とする「漢籍」所蔵の背景となった長期にわたる中国での史料の伝存をめぐる諸様相を取り扱ったものであり、あいにくの悪天候にもかかわらず来場いただいた学内外の研究者より、活発な意見交換がなされた。シンポジウムの内容に関しては、今年度中に各報告者・コメントーターから論文・コメントをご寄稿いただき、ACRI Research Paper の1冊として報告書を刊行し、国内外の関係者・機関に送付する予定である。研究報告の詳細については、本書をご覧いただければ幸いである。

東洋大学 アジア文化研究所 公開シンポジウム

中国史研究と史料利用の現況

—漢籍・石刻・檔案—

2019 11/23 (土) 13:00-18:00

※参加自由・事前登録不要

東洋大学 白山校舎 5号館 2階 5209教室

基調報告

大澤 正昭 (上智大学名誉教授・東洋文庫研究員)

「中国農書をどう読むか—農書の有効性と限界—」

胡 耀飛 (陝西師範大学副教授) 通訳：速水 大 (アジア文化研究所客員研究員)

「《資治通鑑考異》所見《九國志》輯考」

研究報告

千葉 正史 (東洋大学教授・アジア文化研究所研究員)

「清末・民国時期檔案史料の公開と利用の現況—中国・台湾における中央政府檔案公開を中心に—」

兼平 雅子 (立正大学大学院博士後期課程満期退学/陝西師範大学留学)

井上 満奈実 (東北大学大学院博士後期課程/浙江大学留学)

「留学生が見た中国での史料取り扱いのいま」

司会 竹内 洋介・工藤 寿晴 (アジア文化研究所客員研究員)

東洋大学 白山校舎 5号館

〒112-8606
東京都文京区白山五丁目28番20号

- 都営地下鉄三田線「白山」駅下車徒歩5分
- 東京メトロ南北線「本駒込」駅下車徒歩5分
- 都営バス 丸3「東洋大学前」下車すぐ
- 文京区コミュニティバス B-くる「東洋大学前」下車すぐ



主 催：井上円了記念研究助成・研究所プロジェクト

「東洋大学に所蔵される中国語諸史資料のデータベース構築と開発活用」(研究代表：千葉正史)

共 催：東洋大学アジア文化研究所「東アジア地域における統合と交流」研究所 (代表：千葉正史)

後 援：白山史学会

連絡先：東洋大学アジア文化研究所 / 研究推進課 (TEL：03-3945-7400)



東洋大学

「哲学する心」の
軌跡とこれから

The Foundation and Future of Philosophical Mind
~井上円了没後 100 周年~
THE CENTENARY OF THE DEATH OF ENRYO INOUE